

ウルトラマンマックス

最終回前編

地上壊滅の序曲

第五稿

脚本／小中千昭

TelePlay by Chiaki J. Konaka

2006／01／07

登場人物

トウマ・カイト

コイシカワ・ミズキ

コバ・ケンジロウ

シヨーン・ホワイト

エリー

ヒジカタ・シゲル

ヨシナガ教授

トミオカ長官

ダテ博士

オートマトン 機械人形（デロス）

機械獣 スカウト・バーサーク（偵察型バーサーク）

機械獣 サテライト・バーサーク（小型バーサーク）

ウルトラマンマックス

○衛星高度

青い星、地球——。
突如、日本の東京湾に閃光。

○東京湾岸／数時間後

ベース・タイタンが破壊されており、そこには雲を
突く程に巨大な尖塔が聳え立っている。

N 「ベース・タイタンが破壊されてしまった！ 日本ばかりで
はない——」

○世界各国UDF基地

北米、豪州、西欧、南米——、世界各主要地区に尖
塔が佇立している。

N 「世界各国UDF基地もが同時に攻撃を受け壊滅的打撃を
受け、その機能を失った」

○再び東京湾岸

破壊されたベース・タイタンの残骸。

N 「このまま世界人類は未来を失い滅んでしまうのだろうか。
一体何が起こったのか——、二週間前に時間を戻そう」

○東京都市部

全身が隠し武器の痩身な機械獣、スカウト・バーサ
ークとDASHが交戦中。

機械獣、ミズキのバードーを破碎。

○バードーコクピット

ミズキ「(悲鳴)——くううっ！」

○東京都市部／地上

カイト、マックススパークを掲げ——、変身。
時が止まる——。

○光のゾーン

マックスの声「カイト——」

カイト「——？」

マックス「——私はもうすぐ地球から去らねばならない」

カイト「えっ——!?!」

時が止まった光の中で対峙するカイトとマックス。

マックス「M78星雲に帰る時が近づいている」

カイト「——（うろたえている）」

○東京都市部

出現したマックス、バード1をキャッチすべく跳躍。
そのマックスを、機械獣、攻撃。

苦しみつつまックス、バード1を着地させる。

その背後に襲いかかる機械獣。

街のそこにあるオートマトン、見ている。

マックスギャラクシー召喚。

光の剣で、機械獣の剣群をなぎ払い——

▼機械獣POV（ビデオモニター）

マックスの動き、武器を激的な速さで計測中。

マックスのギャラクシーソード、遂に機械獣の体を

真っ二つに割り——、爆発。

オートマトンはただ無反応にその炎を見つめる——。

○ベースタイタン／夜

平和が戻った東京——。

N 「正体不明の機械獣はマックスとダッシュに倒され、平和な夜が戻った——」

○同／テラス

星空を見上げるミズキとエリー、そしてカイト。

カイト「(モノ) マックスはもうすぐ地球からいなくなってしま
う——。そうしたら、俺たちだけでこの星を——」

ミズキ「カイト、何考えてるの？」

カイト「えっ…… あ、いや……」

ミズキ「——このままずっと平和だったらいいのになあ……。あ
そうだ、エリーには未来予知能力ってある？」

エリー「予知ではなく予測です」

ミズキ「ね、地球はいつか平和になるよね。あたしたちが生きて
る内に、怪獣とか侵略とか、人間同士の戦争とかも無く
なって、平和になってるかなあ」

エリー「人類が50年後に平和に繁栄している可能性は、62%です」
カイトとミズキ、険しい顔に。

カイト「そんなに低いのか……」

エリー「——ミズキ隊員が50年後に生きている可能性は——、28
%しかありません」

ミズキ「えッ——、どうして……。あたしもっと早く死ぬって事
……。？ あたし、いつ死ぬの……。？」

カイト「よせミズキ。そんな事聞くもんじゃない」

ミズキ「——(強く)知りたいの！——(声を落とす)あたし、
ずっと厭な夢ばかり見てるの……。エリー、教えて」

エリー「(暫く黙り、じっとミズキを見つめていたが)——ミズ
キ隊員のこれまでのミッションに於ける負傷率から導か
れる予測により、ミズキ隊員が一年以内に死亡する確率
は48%です」

ミズキ「(衝撃)」

○街のそとこ

路傍——、橋の縁——、公園——
50cm程の銅の様な質感の人形が置き去られている。
それに目を留める人はいない。
と——、それまで静かだったオートマトン達、一斉
に口を開き始め——

オートマトン「地上の人間達に宣告する——」

○街

オートマトンの声が重なっていく。

オートマトン「(オフ)今すぐ、地球を汚す戦争行為をやめよ。

化石燃料を燃焼させる経済活動をやめよ」

▼工場の煙突が吐き出す煙(スチルフラッシュ)

▼渋滞する道の車の排気煙(スチルフラッシュ)

オートマトン「(オフ)地球人類が、地球大気を汚す事でしか文明を築けないのなら、文明を捨てて退化せよ」

○ベースタイタン／DASH司令部

モニタから流れる音声を聞いている隊員。

オートマトン「(オフ)今から30時間以内に、地上の人類が全ての経済活動を止めねば、我々デロスはバーサーク・システムを起動し、全世界のDASH基地を破壊する——」

○司令部

ミズキ「——(沈痛)30時間以内、って……」
エリー「世界各国で、同じ内容のメッセージが届いています」
ヒジカタ「デロスとは何者なんだ……」

モニタに映る、科学分析室のヨシナガ。

モニタ内ヨシナガ「おしゃべり人形の分析を始めているわ」

ヨシナガの背後の台には、オートマトン。

モニタ内ヨシナガ「どういふシステムで動いているのか不明だけど、ただメッセージを伝えるだけのものじゃなさそうね」

ショーン「Automaton……」

コバ「オートマトン？」

ショーン「昔の機械仕掛けの人形の事だよ」

コバ「じゃあ、あれを作ったのは人間てことかよ」

ヒジカタ「待て、結論を急ぐな。エリー、UDF監視衛星の警戒体制を強め、宇宙からの侵略を警戒しろ」

エリー「了解。ガーディアン、デフコン3に設定」

▼モニタに映るUDF監視衛星ガーディアン。

沈痛な顔でいたミズキ——、ヘルメットを手にし

ミズキ「基地の周囲を調査してきます」

ヒジカタ「よし」

カイト「——自分も行きます（後を追う）」

○科学解析室

助手と共に、ヨシナガはオートマトンを分解。

脳に当たる部位に直径15センチ程の塊がある。

ヨシナガ「これがオートマトンのコアかしら……」

○DASHアルファ車内

ミズキ「29時間後、何が起きるの——？ その時、あたしも——」

カイト「莫迦な事考えるなよ！ ミズキ！ 君はこの星が平和になるまで絶対生きるんだ！」

ミズキ「——（弱い笑み）50年後……。その頃カイトはどうしてるんだろうね……」

カイト「——俺だって、ミズキと一緒に生きてるさ」

ミズキ「——え？（当惑）」

カイト「——いや、一緒に、そういう意味とかじゃなく——」

ミズキ「あっ、あそこにも！」

カイト「！」

○湾岸地区

車から降りるカイトら。
車道の傍らに置かれているオートマトンを、遠巻きに付近のサラリーマンらが見ている。

ミズキ「下がって下さい！」

近づくカイト——。

と！ 突如オートマトン、口蓋を開く。

オートマトン「（心の声）ウルトラマンマックス、この星から去れ。デロスの邪魔をしないでくれ」

カイト「！ 誰なんだ？」

ミズキ「え、カイトどうしたの？」

カイト「——いや——」

ミズキ、PADで通信。

ミズキ「こちらミズキ。エリアJT240にてオートマトン発見」
ヒジカタ「（無線オフ）すぐ基地に戻れ。事態が急変した」
カイト+ミズキ「！」

○モニタ内映像／ベース・ポセイドン

太平洋上に浮かぶベース・ポセイドンが突如、地下からの攻撃を受け爆発。

○司令室

画面を見て凍りつくDASH隊員。

と、モニタには輸送機内のダテ博士の顔が映る。

ダテ博士「ベース・ポセイドンは、地下からの攻撃を受けて壊滅したが、。攻撃の3分前に、例の機械人形からの通信が入って警告を受けた為、幸い基地の隊員は全員無事だ」

トミオカ長官「（安堵）無事で良かった……」

ヒジカタ「しかし何故、ベース・ポセイドンが最初に……」

ヨシナガ「（思案）ベース・ポセイドンは、地殻探査をメインに

調査していた。(悟る) どうやら敵は、あたしたちの足元にいる様よ」

ヒジカタ「!?」

ヨシナガ「あのオートマトンの機械部分に使われている金属は元素119。地下8kmにしか存在しないものなの」

ショーン「I can't believe this... この地球に、人類以外の文明があるなんて」

ヨシナガ「エリー、地殻調査の最新リポートを出して」

エリー「了解」

モニタに映る、地球断面図。

エリー「地球は、核の上をマントルが対流し、その上に我々が住む地殻が極く薄く表面に広がっています。地殻は厚くても30km。ベース・ポセイドン沖では10kmしかありません。ベース・ポセイドンの地殻調査プロジェクトは、地殻を深く掘って、地球の事を調べていました」

コバ「その調査が気に入らない奴がいたって事か……」

ヨシナガ「(頷き) 地殻とマントルの境目、モホロビッチ不連続面には、我々が知らない空間があるみたい。それを、地殻調査船が突き止めたところだったの」

ショーン「流れているマントルの上にあるから、その空間も常に移動している。これまで発見されなかった訳だ——」

ヒジカタ「(思案) エリー、DASHマザーにバード3を搭載、ドリル・ユニット装備」

エリー「了解」

トミオカ「どうするのだね、ヒジカタ隊長」

ヒジカタ「デロスと交渉を試みます。地上にこれまで無干渉であった彼らがどうして今、攻撃して来ようとしているのか。その真意を知らねばなりません。カイト、ミズキ」
拝命姿勢をとる二人。

ヒジカタ「君たちにバード3で、デロスのいるところへ向かって貰う。コバ、ショーンはマザーでバード3を移送」

隊員「了解！」

○湾岸地区

避難していく市民。

警察アナウンス「この地区には現在避難警告が発令されています。

全ての人は即刻退避して下さい」

じつと虚空を見据えているオートマトン。

N 「UDFと警察の協力により、ベースタイタン付近の住民は避難された」

○太平洋上

飛行するDASHマザー。

ヒジカタ「(無線/オフ)デロスの調査が目的だ。いきなり攻撃するな」

○バード3/マザー・コクピット

カイト「了解」

モニタ内エリー「ミズキ隊員」

ミズキ「？」

モニタ内エリー「(無表情に)気をつけて下さい」

ミズキ「——判ってる。ありがとう、エリー」

モニタ内エリー「……」

コバ「カイト！ ミズキ！ 頼んだぜ！」

ショーン「無事を祈ってるよ！」

○太平洋上

マザーから発進するバード3 (ドリルノーズ装着)
そのまま海に潜っていく。

○バード3コクピット

ミズキ「海底まで150m——。バード3、モード・チェンジ」

カイト「バード3、モード・チェンジ（操作）」

○海底

降下してきたバード3、潜水モードからドリルタンクモードに。

ミズキ「（オフ／無線）バード3、地中に潜ります」

○司令室

エリー「DASHマザー、帰投しました」

ヒジカタ「（トミオカに）UDFハンガーを臨時基地として手配しました。長官もそろそろ退避を」

トミオカ「世界UDFの総意は、同じ地球に住む者同士なら、戦わずに解決したいというものだ。しかし、地上の工場を全て一斉に止め、自動車、飛行機の使用を禁じるなど不可能だ。交渉が不可能だった場合、防衛戦争をしなくてはならない」

ヒジカタ「——私は覚悟が来ています。しかし——」

トミオカ「——今はカイトとミズキに託そう……」

眼前の仮想ウィンドウを見つめているエリー。

○地中

岩盤を突き進むバード3。ドリルで岩盤を破碎し、ドリル基部から発する超音波スマッシュャーで砕いた岩を液化化させ、滑らかに掘り進んでいく。

○バード3コクピット

カイト「モホロビッチ不連続面到達まで、あと二千m——」

ミズキ「了解——」

沈黙——。

カイト「——あの、エリーの予測、だけど……」

ミズキ「——大丈夫だよ……」

カイト「——」

ミズキ「——人間は滅んだりなんかしないし——、あたしだって絶対生き残って——、幸せになる」

ミズキ、輝く様な微笑みをカイトに向ける。

カイト「——うん……」

地殻を割って進むバード3。

カイト「——（モノ）いつまでもマックスに頼れないって事は、もう考えていた事だ——。俺たち自身が頑張って未来を変えてかなきゃ——」

ミズキ「マックスって、どこから来たのかな……」

カイト「（仰天）どっ、えっ……」

ミズキ「（くす）何そんなに驚いてるの？　もしかして、マックスの事考えてた？」

カイト「な、え、うん……」

ミズキ「遠くの星から来たんだろうなあ……。あたしたち人類も平和になったら、遠い星に旅立ったりするのかな……」

カイト「——（微笑）へえ……。そんな想像してたんだ」

ミズキ「あたしは、星の世界が好きだからパイロットになったんだよ（微笑）。本当は遠い星にまでだって飛んでみたい」

カイト「（苦笑）今はその逆だけだね」

笑いあう二人。

と、突如ウォーニングが鳴る。

カイト「**三**（パネル見て）センサーの表示がおかしい！　まず

い二 岩盤が無くなる！」

ミズキ「前進微速、ドリル停止」

激しい振動。

カイト「くっっ！　気づくのが遅かった**二**」

○地中大空洞

広大なる空洞の天井部に穴が空き、バード3のドリ

ルが突き出し——落下し始める。

○バード3コクピット

眼下に広がるのは異景。淡い光の中、数百m下の底には人類とは異なる文化が築いた異形の都市。

カイト「ミズキニ フライイング・モードに——」

ミズキ「ドリル・ユニット付きじゃ飛べないのニ けど——」

ミズキ、必死にパネル操作し、ジェット浮上エンジン起動。

操縦桿を必死に引くミズキ。カイト、ミズキの背後から被さり、一緒になって操縦桿を引く。

カイト「ミズキニ——俺たちは——」

ミズキ「くうううつつ」

カイト「——俺たちは絶対——」

○地中大空洞

ヘッド・ヘヴィ態勢のまま、降下していくバード3。

○バード3コクピット

ミズキとカイト、渾身の力で操縦桿を引く。

カイト+ミズキ「(気合)」

○地中大空洞／デロス都市

失速し墜落しそうながらも、都市群のすぐ上空にて辛うじて態勢を立て直すか——、着地失敗！

衝撃で上下反転しながら地滑りし——、停止。

○ベースタイタン／ゲート

UDF職員達の避難が終わりつつある。

UDF隊員1「これで最後か！」
UDF隊員2「確認しました。総員退避しました」
基地から飛び立つマザー。

○DASHマザーコクピット

ヒジカタ、トミオカ、エリーが搭乗している。
ヒジカタ「(無線を聞き) ベースタイタンの退避、完了しました」
トミオカ「0時まで、あと15分か——」

エリーは、無表情のままココを抱いている。

エリー「ミズキ隊員とカイト隊員は……」

ヒジカタ「定時連絡が来ないな……。エリー、呼んでくれ」

エリー「了解。(通信モード) ミズキ隊員応答願います」

ザザッ——。ノイズしか聞こえず。

エリー「ミズキ隊員、カイト隊員、応答願います——」

○バード3コクピット(上下反転)

キャノピーは割れている。

カイト「(やや頭を打っている) ミズキ——大丈夫か……」

見ると、ミズキはコクピット前方で不自然な屈曲をし
気を失っていた。

カイト「ミ、ミズキ！」

○DASHマザーコクピット

エリー「ミズキ隊員——、応答——」

エリーPOV。カイトとミズキのヴァイタル・サイン・
モニタ表示がスパー・インポーズされる。

ミズキのウェーブ、弱まっている。

エリー「ミズキ隊員の生命反応、低下……」

○バード3コクピット脇

必死にミズキの体を、機内から引き出すカイト。

ミズキ「しっかりしろミズキ！」

ハッと時計を見るカイト。

カイト「あと3分……。くそっ！ ミズキ、待っていてくれよ！」

○デロス都市

バード3から降り立つカイト。

周辺の巨大建築物は、まるで遺跡の様。その都市に動く者の影は無い。

カイト「——おおおい！ 地上から話をしに来たあああ！」

カイトの声、反響し、共鳴していく。しかし返答は無い。まるで墓標の様に、無数のカプセルが地面から壁面に向かって広がっている。

カイト「無茶な要求をしないでくれ！ 地上には平和を望む人間が大勢暮らしているんだ！」

答えは無い——と、突如起こる地響き。

カイト「!？」

都市建造物の遥か後方から、巨大な尖塔型ミサイルが何本も突出。伽藍の天井に向かって伸びていく。

カイト「(愕然) 攻撃を始めたのか!——よせええええ!」

○湾岸部

無人の街の路傍に立つ、オートマトン、口を開き、まるで笑うかの様に揺れている。

○マザーコクピット

エリー「0時まで、40秒」

ヒジカタ「——カイト……」

○デロス都市

伽藍の天井には、数十の巨大孔が空き、尖塔ミサイルは全て発射されてしまった。

カイト「ここまで来て——、何にも出来なかったのか……？

馬鹿野郎オオオオオオ二 何故こんな事を二二二

カイト、喚きながらマックスパークを抜き——

と！ カイトの眼前にふっと現れ、制止する様に掌を突き出すマックス（の幻影）。

マックス「カイト、変身してはならない」

カイト「何故だ！ 地上が破壊されようとしているんだ二二」

マックス「これは地球という同じ星の異なる文明同士の諍いだ。

私がその争いに加担する訳にはいかない」

カイト「——（冷静になっている）マックス——、俺を信じてくれ。俺はマックスの力で、デロスを滅ぼす事などしない」

幻のマックス、俯き思案する。

カイト「俺は、みんなを助けたいんだよ——」

カイトの前に、もうマックスはいない。

ジャキン——。背後から突然聞こえる金属擦過音。

カイト「（振り向き）——二二」

カイトに襲いかかる、小型機械獣の脚。

○無人の司令室

モニタに、カウントダウンが表示されている。

「3——、2——、1」

と、ややして激しく揺れだす司令室。

○マザー／バードーコクピット

ヒジカタ「二二 始まった！」

ベースタイタンは、下部から閃光に包まれていく。

ヒジカタ、操縦桿を引き、急上昇。

衝撃波が遅れて襲いかかり、コクピット内揺れる。

コバ「くそおおおっ！ ベース・タイタンが二二」

○東京湾岸

ベースタイタンが粉碎され衝撃波が周囲を破碎。
そして——、地下より屹立しだす、鈍色の尖塔。

○デロス都市

カイト、バーサークに両腕を掴まれ持ち上げられる。
カイト「俺は闘いに来たんじゃないんだ！」

バーサークの鋭い爪が、カイトを引き裂かんと開く。

ミズキ「離しなさい！」

カイト「！」

口端に血を滲ませ、今にも倒れそうなミズキ、DA
SHパッドを掲げ、強い目でバーサークを睨む。

ミズキ「(パッドを片手で操作)カイトを離さないとバード3を
ここで自爆させるわ」

背後のバード3、照明を点灯し低い唸り音上げる。

ミズキ「密閉されたこの空間でバード3が爆発したら、この都市
ごと消滅するわよ！」

と——、バーサーク、軋む様な合成声を発する。

バーサーク「我はバーサーク。デロスを保護するシステム」

カイト「!？」

○東京湾岸

そびえ立つ尖塔——。その先端からはテスラ電光が
激しく起こっているそこへ接近するバード1、2。

○バード1コクピット

コバ「くそう——、こんな莫迦デカいもん突き出しやがって。

スネークウィザード発射！」

○東京湾岸

発射されたミサイル、すぐにバードーの前で暴発。
ショーン「(オフ/無線) コバ！ ミサイルを撃つな！」

○UDFハンガー外観/数十分後

尖塔を遠方に望む横浜湾岸に在る、巨大なパラボラ
アンテナを擁するUDFハンガー。
エリー「(オフ) あの塔は膨大なα粒子発生システムで、空気中
の窒素と二酸化炭素を酸素に変換しています」

○UDFハンガー/臨時司令部

DASH隊員、長官がモニタを注視。
エリー「このまま世界各国の塔が酸素変換を続けると、8週間で
地球全体の大気組成が変わります」

ショーン「高濃度酸素があたの塔に充滿している。攻撃出来ない」
コバ「このまま手も出せないのかよ……。 (激しく) くそう！」
ヒジカタ「地球の大気を変え、地上の生物を絶滅させるつもりな
のか……？」

ヨシナガ教授が、コアを抱え入ってくる。
ヨシナガ「そうではないわ。むしろ地球の大気を太古の時代に戻
そうとしているのよ」

ショーン「What?」

○デロス都市

カイトの自由を奪っているバーサーク。
ミズキ「同じ地球に住んでいる者同士、どうして争わなきゃなら
ないの!」 そんなにあたしたちに滅んで欲しい!」
バーサーク「地球に生まれた生物を滅ぼしたいと、デロスは考え
てはいない。しかし、地上の人間が地球の環境を変えて
しまった為、デロスは滅びようとしているのだ」

カイト「!?!」

○臨時司令室

ココからアームが伸びオートマトン・コアと接続。

エリー「ココ、オートマトンの情報を解読中——。(エリーの瞳

光彩が高速で動き) デロスは滅びようとする種族……」

ヨシナガ「——やっぱり……」

エリー「地球を取り巻くオゾン層が、人間の産業によって薄くなり、その為に太陽からの有害放射線が地中にまで届く様になってしまった——」

モニタに映る地球の模式図。エリーの説明を图示。

ヨシナガ「太陽の光は私達にとって恵み。けど、オゾン層が遮ってくれている、私達に有害な宇宙放射線をも放っている」

○デロス都市

バーサーク「デロスは太陽の有害放射線で滅びつつある。デロスはバーサーク・システムにデロスの保護を命じた。バーサークはもう止められない」

ミズキ「そんな——、もう、もう間に合わないの……？ 人間は滅びるしかないの……？」

必死に自ら奮い立たせていたミズキ、力を失う。

カイト「ミズキ——」

ミズキ「——(弱く笑み)やっぱり——未来なんて……」

ミズキ、力が尽き、気を失って倒れる。

カイト「ミズキイイイ！ くっそおおお!!」

カイト、渾身の力でバーサークに反撃。腕を掴んでいた爪を無理矢理引き剥がし、ミズキに駆け寄る。

カイト「ミズキ！ しっかりしろミズキ!!」

ミズキ「(苦しげに)御免ねカイト——、あたし、やっぱり……」

カイト「何を言ってるんだよ!! 諦めるなよ!! ミズキ!!」

ミズキ、呼吸停止。

カイト「こんな事……」

○臨時司令室

エリー、硬直。

ヒジカタ「——どうした、エリー」

▼エリーPOV／ミズキのヴァイタル・サイン、直線になっている。

エリー「ミズキ隊員の生命反応が停止……」

コバ＋ション＋ヒジカタ＋ヨシナガ「……」

エリー「（強張った表情のまま）ミズキ——隊員が……」

○デロス都市

カイトの悲痛な叫びが、ネクロポリスの如き巨大空洞内に響き渡る。

以下次回